

的身の深い赤焼土器の壺が主体となり、塊形を呈する土師器の高台付壺が伴う。須恵器の供膳形態はほとんどない。この土器群は手藏田12遺跡のS E 45、S K118（阿部他1985）に併行するものと考えられる。

III期：10世紀中葉一供膳形態の土器は比較的身の深い赤焼土器の壺を中心に、身の浅い壺が伴い、若干の皿がある。赤焼土器の供膳形態が全体の80～88%を占めている。手藏田2遺跡S K142（阿部他1986）や沼田遺跡S D42（佐藤他1984）との共通性を指摘できる。

IV期：10世紀後半一供膳形態の土器は身の浅い赤焼土器を主体とし、身の深いものが若干伴い、小形皿、高台付小形皿が出現する。尾北窯S-4窯式の綠釉陶器が伴う。赤焼土器の供膳形態が全体の90%を越える。

V期：10世紀末葉～11世紀前半一S X1105の土器に代表される土器群である。特殊埋設遺構の土器群は、やや古くなる可能性をもつが、ここではV期として括する。供膳形態には土師器の塊状の高台付壺、身の浅い赤焼土器の壺、高台付壺、小形皿、高台付小形皿、柱状高台付小形皿などがあり、量的には赤焼土器の小形品が多い。10世紀末葉に位置づけられる虎渓山1号窯式の灰釉陶器が伴っている。境興野遺跡S K 4、S K26（川崎他1981）の土器群と同時期と考えられる。

4 地震の時期と特殊埋設遺構

本遺跡と隣接する浮橋遺跡（名和他1989）で発見された「地震跡」については阿子島功氏と筆者らの共同研究というかたちすでに報告した（阿子島他1988）。この報告において、地震によって動いた建物と、動いていない建物があるとしたが、その後の整理・検討の結果、大小の差はあっても掘立柱建物6棟のすべてに地震による掘り方の変形があることが明らかとなった。そして、これらの建物は東区のIII期、IV期に属するものであり、地震が起きた時期は少なくともIV期以降と考えられるに至った。したがって、掘り方の変形は上屋がなくなつてからも起こり得たことになり、同一建物でも変形のあった掘り方と、ない掘り方が共存することとも考え合わせれば、変形は極地的な地盤条件の差に起因すると理解せざるを得ない。

地震の起きた時期はIV期以降であることが明らかとなつたが、東区で建物跡と重複する位置にある特殊埋設遺構（V期）が地震の前か後かを結論づけるためには、なお、証拠不足の感は免れないが、以下の理由から、これらは地震後の所産、すなわち、地震はIV期とV期の間に起きたと考えたい。

第1の理由は特殊埋設遺構の掘り方に地震による変形が認められないことである。この点については、極地的な地盤条件で変形がなかったと見ることも可能であるが、6基とも

変形がないことは、地震後の遺構の可能性が高いことを示唆する。

第2の理由は特殊埋設遺構の性格論にかかわる。これらの遺構は仏事による祭祀遺構の可能性が高いということであり(平川 南氏の御教示による)、地鎮に関係すると見て大きな誤りはないであろう。地鎮には、建築する地を浄化するという意味があると言われており(水野1985)、祭祀が行なわれた時には、これらの遺構の分布する範囲内は更地であったと考えられる。とすれば、その分布範囲からみて、東区には建物がなかったことになり、この事実は遺構群の変遷からみても肯首される。III期の企画性をもつ建物群の建築に際する地鎮祭祀がなく、IV期の建物群が廃絶されてから地鎮祭祀がとり行なわれたことはあまりにも不自然である。地震によるIV期建物群の崩壊という事実があつての地鎮祭祀とみてよいのではなかろうか。なお、V期の掘立柱建物跡は検出されていないが、礎石建物となつた可能性がある。1次調査で部分的ではあるが、根固め石のない径30~40cmの丸石を用いた礎石をもつ建物跡が検出されている(野尻他1988)。

5 遺跡の性格

検出した遺構・遺物の検討により、本遺跡の東区は一般集落とは異なった様相をもつものであることが明らかとなった。

- (1) III期の建物であるS B 1・2・4は企画性を持って配置されたものであり、規模も大きく官衙の正殿、東脇殿、後殿の位置関係に類似すること。
- (2) 出土土器の組成をみると供膳形態が84%、煮沸形態が12.7%、貯蔵形態が3.3%となり、供膳形態の土器の割合が高い。庄内平野の集落遺跡では30~60%が煮沸形態の土器となるのが通例であり、多賀城政庁(白鳥1982)の98%には及ばないものの、集落遺跡に比べ、供膳形態の出現頻度がはるかに高いこと。
- (3) 墨書土器の中に文書形成をもつものや、習書と思われるものがあることから、本遺跡で文書が作成された可能性が高く、官人の帶に使われた石帶も出土したこと。
- (4) 地鎮の祭祀が一般集落で営まれたとは考えにくいこと。

以上により、東区が一般集落ではなく、官衙的な性格を持つ可能性が生じたが、もし、官衙であったとすれば、いったい何であったのか、今後に残された検討課題は多い。

引用・参考文献(抄)

- 町田 洋 新井房夫 森脇 広(1981)：「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51 pp562~569
川崎利夫 安部 実(1982)：『境興野遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第46集
井上克弘 山田一郎(1982)：「東北地方における奈良~平安時代遺跡埋土中の粉状パミスについて」『岩手県文化財調査報告書第68集』 pp442~459
白鳥良一(1982)：「第VII章考察 2遺跡 (2)土器」『多賀城跡-政府跡本文編-』 pp387~393
阿部明彦 渋谷孝雄(1983)：『宅田遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第72集
佐藤庄一 野尻 侃(1984)：『沼田遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第78集
阿部明彦 大泉俊彦(1985)：『手藏田遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第87集
水野正好(1985)：「招福・除災-その考古学-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 pp291~322
内鷗兵衛(1986)：「第2章5 やませに悩む東北地方」「日本の自然5 日本の気候」 pp93~101
阿部明彦 野尻 侃(1986)：『手藏田遺跡発掘調査報告書(2)』 山形県埋蔵文化財調査報告書第98集
阿子島 功 渋谷孝雄 名和達朗：「山形県遊佐町下長橋遺跡・浮橋遺跡にみられた噴砂・流砂現象」「地形』10-1 pp19~20 (演旨)
名和達朗 月山隆弘(1989)：『浮橋遺跡 下長橋遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第141集